

理想の都市とは

田村 明

法政大学法学部教授

何時の時代にも語られた

理想の都市は、これまで多くの人々によって語られてきた。古代では、理想の都市とは、すなわち理想の国家のことであった。トマス・モアの書いた有名な「ユートピア」は、現在でも盛んに使われる「〇〇ピア」の元祖である。文明評論家のルイス・マンフォードはそれらを「ユートピアの系譜」としてまとめた。もちろん西欧だけではなく、インドでも中国でも、さまざまな理想の都市形態が提案されていた。

いま、それらについていちいち取り上げようというのではない。

ここで言いたいのは、何時の時代にも理想の都市が語られたという事実である。それは、人々は現実の都市に必ずしも満足せず、いつも理想を求めてきたことを意味する。

理想は往々にして現実から離れ「空想」といわれることもある。空想は現実を動かしてゆく指針にはならない。これにたいして、理想は現実を変えてゆく指針となり、やがて実現してゆく。マンフォードは「逃避のユートピア」にたいして、現実を変える力にもなるものを「再建のユートピア」と呼んだ。

現代の都市は、ますます膨張を続け、物理的に拡大し、大多数の人々は、都市現象とでもいう大きな流れから逃れることはできない。激しい流れのなかにいると、周りが見えなくなる。理想をもたなければ、現実の波に揉まれ、右往左往するだけで、とんでもない所に押し流されてしまう。

都市をよりよいものにしたと望むなら、市民はなにが理想の都市なのかを考え、確認しておくなくてはならない。もし、誤ったものを理想とすると、都市が人々の生活を破壊することにもなりかねない。過去にはそういう事実もあった。都市は人間よりも、はるかに寿命が長いものだから、望ましい理想なら今すぐに実現

できなくても、人々のためな努力で、少しづつでも確実に実ってゆくだろう。

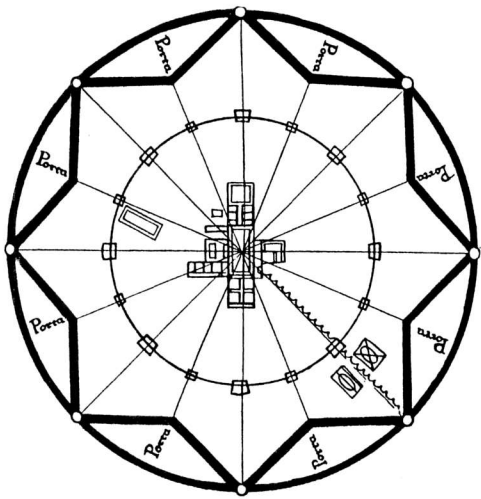
ではどのような都市が理想であろうか。以下に検証してみよう。

安全な都市が基礎条件

人は集まって住む動物である。いつの頃からか定住する集落をつくった。人が家族単位を超えて、多数の老若男女が集まり住むのには、個人や、一族以上の相互扶助や協働的な目的があったに違いない。その重要な目的の一つは、より安全性を確保できるからであつたらう。

集落はまず、経験や知恵を働かして、安全な地形を選び、周りに堀を巡らし、共同して外の危険から守った。集落が都市になっても、目標は変わらない。

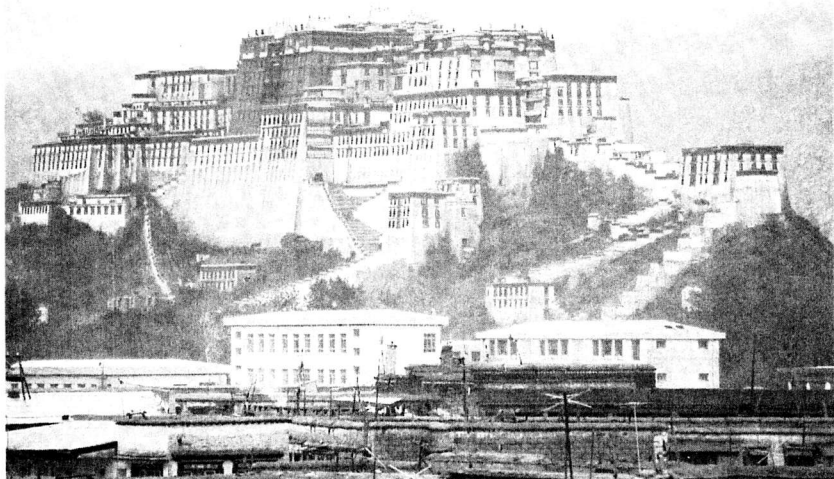
人が日常的に生きてゆくの最も必要なのは、食料と水であ



1457年、ミラノのスフォルツァが建築家フィラレテに依頼して描かせた理想都市

る。それがなくては安全ではない。始め都市は水の得やすい泉のほとりに作られる。泉は理想の姿だった。大河の近くは水は豊富でも、洪水で命を失うこともあり、安全ではない。やがて、人類はこの矛盾を調和させるため、水を治める技術を生み、水をよく知る知恵を修める。中国では水を治めた禹は皇帝となった。エジプトでは天文学が進み、洪水の時を知ることができた。大河のほとりに花開く古代都市と古代文明は、安全性をつくりだすことから始まった。

わざわざ理想といわなくても、安全は当然と考えられるが、当初は安全感があるということは、理想の都市の姿だったろう。それなのに、現在では都市の基盤である安全性が脅かされている。人々は災害を忘れ、拡大や集積を求め大規模化し、密集した。拡大と安全という二つは分裂し衝突する。東京の地震はなくならないが、人々は集まってくる。現代都市は危険と同居することを意



チベットのラサのポタラ宮

味し、安全性はいつも犠牲になっている。

安全性は理想の都市の第一の条件のはずだが、現代都市では自然の要素だけでなく、人間自らの手でも危険を増大させている。危険要素も多様になってきた。

人間活動によっては大気や水が汚染され、それが人の健康を蝕む。車という人間の発明した現代の凶器は、一瞬にして人の命を奪う。そこから、弱い人間をどう守るかも課題である。都市犯罪も複雑になり、暴動やテロも発生するかもしれない。麻薬や各種のドラッグ、あるいはエイズも、ますます都市の危険度を高めている。

このような多様な危険から人々を守ることは理想的な都市の大事な基礎条件である。どんなに、他の点で優れていても、安全でない都市では、人はいつ生命や健康を奪われるかもしれないし、その危険性が高まれば、日常的にも不安で心理的な疲労も大きい。

経済力のある都市から健康な生活のできる都市

人々は、しだいにより充実した都市を求める。とくに近代になって、経済活動を活発にすることが求められ、それが多くの都市を生み出した。

経済活動がうまく行わなければ、都市の存立基盤が危うくなり生活もできない。ところで、近世までは、住まいと経済活動は同じ場所で行われた。住むための便利さと、仕事をするための便利さはうまく共存していた。それが、近代では経済活動が大規模化し、都市が拡張して職住は分離し、職人や小規模商人の時代とは違ってきた。

産業革命以後になると、多くの近代都市は、産業を発展させ、経済力の拡大を目標にして発展した。産業の発展こそが理想で、大きなエネルギーを使い、多量の労働力を動員し、大量の物資を使い、大量の産物を生み出す。この時代には、煙突からもくもくと盛大に上がる煙は、経済発展の象徴だった。大阪は「煙の都」と言われ、理想の都市の姿として、小学校の教科書に載せられる。かつて難波の都、つまり大阪に都した仁徳天皇は、民の竈からの煙が立ち登るのを見て、民が豊かになったと言った故事がある。

工場からの煙は、古代の民の竈からの煙の現代版と見なされていた。そればかりか、もつと沢山の煙突が立ち並び、煙が都市を覆っている姿が未来の理想の都市と描かれる。その頃、工場の煤煙ですぐに真っ黒になる洗濯物に、生活者は苦労していた。セメントの灰が工場の周辺に飛び散って、大きな住民運動になったこともある。だが、そんなことをかき消してしまいうらい、生産こそが都市の理想であった。

マンフォードは、こうした都市を「石炭の都市」という。いまから見れば、公害のかたまりのような石炭の都市は、かつては理想の都市であった。生産性の高い都市こそが理想であった。しかし、そのまままうまくゆくはずがない。世界の工場と言われた十九世紀のイギリスの都市は、同時に最も汚れて、健康や生命という都市の基盤になる安全性さえ脅かされる不健康な都市だったのである。

そこで、健康的で衛生的な緑や太陽、新鮮な空気がある都市が理想とされる。ただの田舎ではなく、産業社会に応じた職場をもった都市が求められる。二十世紀初頭にエベネザー・ハワードが描いて見せた「田園都市」は、緑のなかに職場と生活を再び融合させようという試みだった。田園都市は、二十世紀を通じて理想の都市のモデルとして語られ、実行に移され、ニュータウン政策などとしてさらに現実化していった。

産業社会は、工場生産から第三次産業の時代になっても、あいかかわらず経済性と効率性を求めている。現在でも、煙こそ無くなっているが、いろいろな都市の長期計画では、経済力の向上が重要な目標である。だが、経済性だけを強く求めると、都心から居住地を遠くに追い払い、都市は人の住みにくい不健康なものになる。経済性を無視することはできないが、そのなかでもどこまで生活の充実を実現できるかが求められている。

アメニティある都市—人間的な都市

経済力があり、所得が得られるだけでは人間は満足しない。人間は機械ではない。細やかな感性をもっている。生きて、働いて、暮らすだけではなく、安らぎ、喜び、楽しさ、心地好さがほしい。量的にははつきり計れない生活の質を求めてゆく。

美しい都市もほしい。市民が協力して都市を美しく個性的にするのがアーバンデザインの手法である。イギリスの都市計画では、二十世紀始めから、こうしたアメニティの充実が究極の目標とされている。それは、石炭の都市の反省によるものでもあった。アメニティとは、はつきり定義しにくいだが、イギリス人なら誰でも分かっている感情だという。簡単に言えば機能だけではなく、より人間らしく暮らすということである。水や緑もそうだし、美しい花で飾られ、気持ちのよい風がとおり、楽しい人々のさざめきが聞こえる。歴史をしのばせる古い建築物も、その場に相応しい彫刻などもよい。美術館や博物館や音楽堂もほしい。こうした物は、人間を尊重し都市に愛情をもつ人々のココロを育てる。美しい街には、美しい目をした子等が歩く。

アメニティとは「愛する」という語源から生まれたものだが、それは市民の都市への愛情や思い入れで生まれてくるし、それがまた市民の都市への愛着を育てる。

アメニティは「快適性」と訳されるが、どうも物足りない。一人よがりには快適に住むことではなく、もつと人間性全体を豊かにさせ、より人間らしくさせることである。

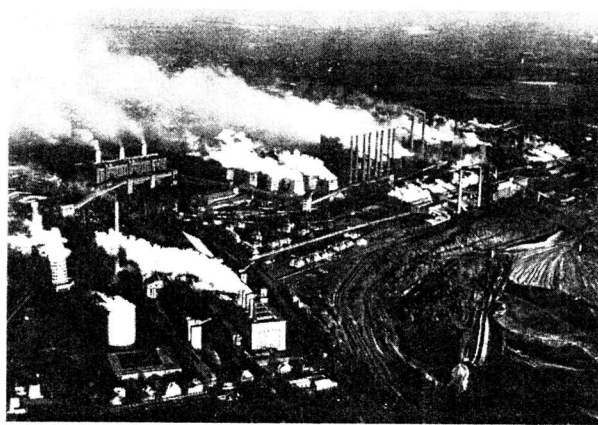
日本でも最近では、ようやく人間的な空間の創造が都市の理想として語られるようになった。アメニティは都市の表面だけを飾ればすむものではない。彫刻ひとつを置くのでも、まず、それを置きたくなるような環境と場をつくることから始めなくてはならない。欧米都市がアメニティに満ちているのと比べて、日本の都市は金をかけた割に充実していないのは、まだ付け焼き刃的なアメニティに終わっているからである。

しかし、こうしたものを理想のひとつとして考えるようになったのは大きな進歩で、それが経済効率優先の思想を、人間の側からは正し、抑制する役割を果たすだろう。

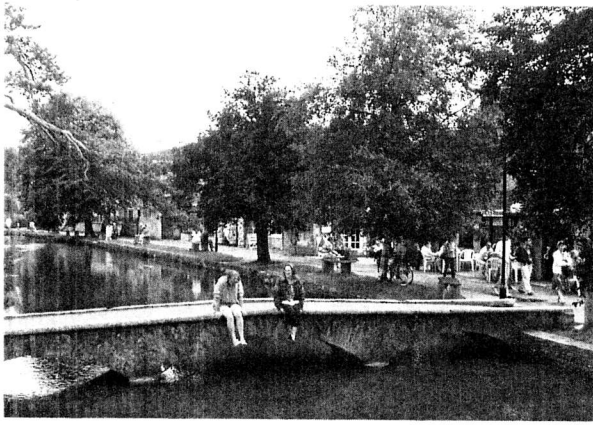
自己実現のできる創造都市

理想の都市としては、さらにもつと積極的な要素も実現したい。

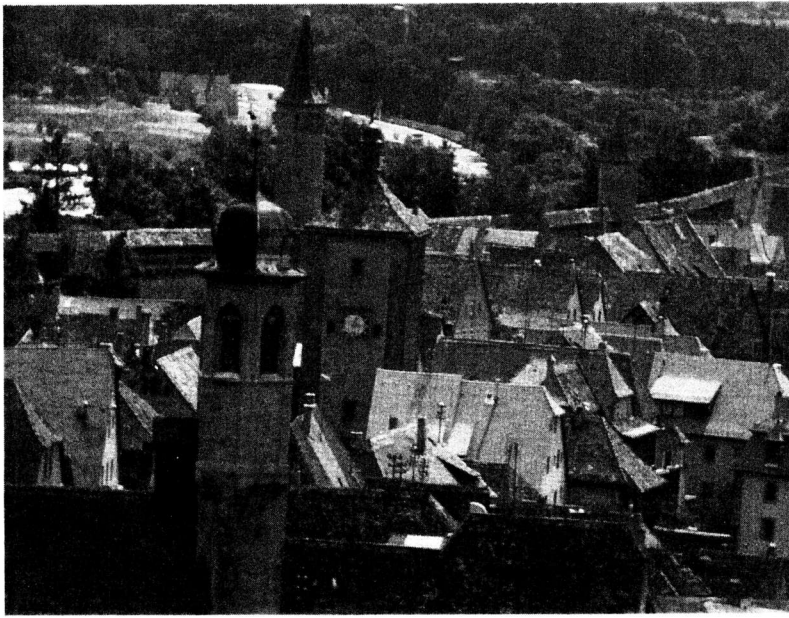
アメニティのある都市が、「自己充足」をさせるものなら、さらに理想的な都市は、人間が人間らしく「自己実現」してゆける



20世紀半ばのルール工業地帯



イギリスのバートン・オン・ザ・ウォーター 水の上にあるおだやかな町



周辺の緑と共存する中世都市ローテンベルク

都市であろう。人は生まれてきた以上は、自分の可能性を一杯伸ばし、生きてゆくだけではなく「生きるに値する」より充実した人生を送りたいだろう。それを実現するのは、職場・地域・家庭どこでもよい。自己実現は、それぞれの個人の問題だが、それができやすい良い環境や状況が必要である。

詩をつくりたくなるような都市もある。絵を書きたくなるような都市もある。スポーツで充実できる都市もある。知恵のある人々の集いの場があって、創造的な刺激を与えられる場もある。新しい科学技術の創造や学問を進めるものもよい。さまざまな芸術活動が行われ、いつも新しい創造があり、その発表の場が得られやすい都市もある。多様な仲間がそれぞれ集まるサロンもほしい。それぞれが多様な充実した時をすごせればよい。

自己実現は多様である。ひとつの都市ですべてを実現することは無理だろう。なにか特色をもつのがよい。イベントなどが都市の特色づけに役立つことができる。

都市での自己実現は、個人の問題だけではなく、周囲の人々の問題でもある。自己実現とは、一人よがりではなく、人に尽くすことによって、認められ感謝されることで、より高度になる。国際社会はそのような人々も求めている。自己満足に甘んじないで、人との関係で他人をも相互に認めあい、助力しあうのが自己実現であろう。他人との関係で、自分が生きていて意味があると自覚できることは、生きている充実感を味わえる。そういう自己実現を可能にさせる機会の多い都市は、理想の都市である。

個人としての自己実現のほかに、都市自身としても、自己実現ができることが理想である。平板で特色のない都市は貧しい。都市も風土や歴史から与えられた持てる個性を生かし、磨いてゆくの、理想の姿である。それは魅力的な都市になるだろう。個性には教科書的な固定した形はない。地域の遺産を承継したうえに立ち、自らが創造してゆくほかはない。世界には、個性的な都市が至るところにある。

市民が活き活きと住む都市

理想の都市は、時代とともに発展してきた。しかし、最初に取り上げた安全性が理想でなくなることはないし、経済から開放されることもない。そうしたものが全て同時に共存できるのが理想の都市である。

だから、バランスが問題になる。かといってバランスばかりを気にしても、理想の都市にはならない。そこには、他にない魅力や個性が必要である。そうした都市では、都市を愛する市民が大勢いるはずである。理想の都市は都市を愛する多くの行動する市民によって作られる。こうした市民が活き活きと住んでいる都市は、理想の都市である。

そういう都市の人々の目は輝いているだろう。それに反して、計算のうえでどんなに所得が高くて、混沌として個性がなかったり、人々の目が欲望にきらきらしていたり、疲れてどろんどろんとして理想の都市とはいえない。理想の都市とは、老若男女の市民が、多少の問題はあっても、それを乗り越えて希望をもって活き活きと生活できるものである。都市の姿や市民生活が、訪れる人々にも、感動を与える都市である。

翼のある風景

別冊
No.3
1993・春・夏



神奈川県立
'93. 8. 29
川崎図書館